

各位

全3ページ
登録速報(2022-136)
2022年 5月25日
クミアイ化学工業株式会社
企画普及部 普及課

登録速報

下記の通り適用拡大登録となりましたので、ご連絡します。

適用拡大登録年月日：2022年5月25日

記

1. 農薬の登録番号及び名称

登録番号 第 20889 号

名称 ベンレート水和剤(住友化学(株)登録)

2. 変更の内容

農薬登録申請書第7項「適用病害虫の範囲及び使用方法」を以下のとおり変更する。

- ・作物名「かんしょ」の適用病害虫名「基腐病」の使用方法「30分間苗基部浸漬」を「30分間苗浸漬」に変更する。

【変更部分】

作物名	適用病害虫名	希釈倍数 または 使用量	使用液量	使用時期	本剤 の 使用 回数	使用方法	ペ/ミル を含む 農薬の 総使用回数
かんしょ	黒斑病 つる割病	500~1000倍	-	植付前	1回	20~30分間苗 基部浸漬	4回以内 (植付時までの処理は 1回以内、 植付後は 3回以内)
	基腐病	種いも重の 0.4%				30分間苗浸漬	
	黒斑病		種いも粉衣				
	つる割病	500~1000倍	20~40mL/株	挿苗時	3回以内	株元灌注	
	斑点病	1000倍	100~300 L/10a	収穫7日前 まで	3回 以内	散布	

3. 当該変更に伴い、農薬登録申請書の記載事項に変更を生ずるときは、その旨及び内容

農薬登録申請書第8項「使用上の注意事項」に(12)を追加し、現行(12)以降を順次繰り下げ、別紙のとおりとする。

【追加事項】

(12) かんしょの基腐病に使用する場合は、苗全体に薬液が浸かるように処理すること。

別紙

【変更後】

8. 使用上の注意事項

- (1) 使用量に合わせ薬液を調製し、使いきること。
- (2) 水稻の種子消毒の場合は下記の注意を守ること。
 - 1) 消毒前に塩水選を行なうこと。
 - 2) 消毒後は水洗いせずに浸種又は播種すること
 - 3) 薬液の温度は10℃以下をさけること。
 - 4) 粉衣処理では付着をよくするために予め種子を湿らせ（塩水選水切り後などが適当）湿粉衣すること。
 - 5) 浸種後処理は種子が鳩胸の時期になるまでに行なうこと。
 - 6) 本剤処理を行なった種子の浸種に当っては次の注意を守ること。
 - ①処理後、種籾を十分風乾してから行なうこと。
 - ②浸種は停滞水中で行なうこと。
 - ③種籾と水の容量比は1：2とし、水の交換は行なわないこと。
ただし、水温が高く種籾が酸素不足になるおそれがある時は静かに換水すること。
- (3) いもち病に対する本剤の育苗箱灌注処理は、本田で発生するいもち病に対しては効果が期待できないので注意すること。
- (4) きゅうり、トマトに対して灌注処理する場合は、誤って高濃度で処理すると、退色や生育抑制等の薬害を生じることがあるので、所定濃度を守ること。
- (5) たまねぎ、いちごに対して苗根部浸漬処理する場合は、誤って高濃度で処理すると、いちごでは活着不良、たまねぎでは、初期生育遅延等の薬害のおそれがあるので、使用方法を厳守すること。
- (6) いちごの萎黄病防除に使用する場合、特に多発地では植付前の土壌くん蒸と本剤処理とを組み合わせるとより有効である。
- (7) こんにゃくの乾腐病防除に使用する場合は、種芋の芽基部を上に向けて並べ、散布液が芽基部に充分かかるように1㎡当り100mL散布すること。
- (8) 麦類の雪腐病防除に使用する場合、散布は根雪近くに行うこと。
- (9) なすの半身萎凋病に対して灌注処理する場合は、定植前及び定植時処理では葉の黄化、生育抑制等の薬害を生じるおそれがあるので定植後に処理すること。
- (10) りんごのモニリア病に使用する場合、多発条件下では効果が劣ることがあるので、発病初期に時期を失しないように散布すること。
- (11) なしの枝枯病、胴枯病に使用する場合は、マシン油乳剤で希釈し、病斑部及びその周辺に1～2回塗布すること。尚、病斑部を削り取った後塗布する場合は木質部が見えない程度に表皮を薄く削ること。
- (12) **かんしょの基腐病に使用する場合は、苗全体に薬液が浸かるように処理すること。**
- (13) 桑の胴枯病に使用する場合の散布適期は9月上・中旬である。
- (14) ハウスなどの常温煙霧用として使用する場合は下記の注意事項を守ること。
 - 1) 煙霧用として使用する場合は専用の常温煙霧機により所定の方法で煙霧すること。
特に常温煙霧装置の設定及び使用にあたっては病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。
 - 2) 作業はできるだけ夕刻行ない、作業終了後6時間以上密閉すること。

- (15) たばこ腰折病に対し親床で使用する場合は薬害を生じるおそれがあるので、希釈倍数は2000倍とし、散布量は1㎡当り1～2Lとすること。また、発芽期には使用しないこと。
- (16) 水耕栽培でトルコギキョウを栽培する場合には、廃液は環境中に流出しないように適切に処理すること。
- (17) 本剤及び同系統の薬剤の連続使用によって薬剤耐性菌が出現し、効果の劣った例があるので過度の連用をさけ、なるべく作用性の異なる薬剤を組み合わせで使用すること。
- (18) 本剤はエトフェンプロックス乳剤またはダイアジノン乳剤と混用した場合、凝固物を生成するため混用をさける。
- (19) 適用作物群に属する作物又はその新品種に本剤を初めて使用する場合は、使用者の責任において事前に薬害の有無を十分確認してから使用すること。なお、普及指導センター、病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。

以上